パートナーイベント

NoMaps2022

NoMaps

会　期：メイン会期　2022年10月19日（水）～23日（日）
会　場：札幌市中心部会場で実施（一部オンライン配信も実施）
主　催：NoMaps実行委員会
共催・後援は多数のため、ウェブサイトでご確認ください。
対　象：起業家や企業の新規事業開発担当などを中心に、新しい社会やビジネスに関心の高い方、一般市民
公式サイト：ウェブサイトhttps://no-maps.jp

総事業数82事業　参加者総数　リアルイベント来場者数30,512人　オンライン配信ライブ視聴者数7,535人
【Conference】　60セッション、来場者1,519人、ライブ視聴者数7,535人
【Exhibition】　5事業、来場者数15,341人
【Event】　7事業、来場者15,438人
【Meet-up】　8事業、来場者1,555人
【Experiment】　2事業、2,053人

■開催内容

先端テクノロジーや斬新なアイデアを核とした「新しい価値観/文化/社会の姿」を提案するビジネスコンテンツをテーマに、「会議（Conference）」「展示（Exhibition）」「興行（Event）」「交流（Meet-up）」「実験（Experiment）」の5つの事業によって、新たなビジネスを生み出し、加速させるための場を提供している。

2022年度は、社会的情勢の変化を鑑み、改めて“まちなか同時多発フェス”をキーワードとして掲げて企画。多数の企業・団体等と新たに連携しながら、札幌中心部でのジャンルや形態に囚われない複合型フェスティバルとして、3年ぶりにリアルイベントを全面に打ち出しつつ、コロナ禍で培ったオンライン配信ノウハウなども併用してのハイブリッドイベントとして開催した。

〈会議（Conference）〉

NoMaps カンファレンスでは、新しい技術・サービス・アイデアで道なき道を切り拓く多様なゲストを招き、世界に展開するビジネスから、地方創生を目指したクリエイティブな取組まで、多様なテーマのカンファレンスを集中的に開催。新型コロナウィルス感染症対策としてオンライン配信をメインとし、会場での聴講は人数を抑えた形でのハイブリッド形式を主軸として展開しましたが、ゲストの多くを招聘しリアルでの交流につなげた。

〈展示（Exhibition）〉

2019年以来となるチ・カ・ホでの体験展示を再開。“キタミライ祭”として「サイバーボッチャS」などの体験展示、ロボコン／ロケットの世界大会出場学生チームの機体展示などを行った。SCARTSではAR合気道体験展示などを展開。また「魔改造の夜展」（NHK札幌放送局）、「観光・ホテル・外食産業展HOKKAIDO2022」（アクセスサッポロ）、「Message Tree」（さっぽろテレビ塔）がNoMaps時期に合わせて開催。

〈興行（Event）〉

「札幌ランタンナイト」「ちょっとだけ短くなったロングテーブルダイニング」などの大型イベントを連携事業として組み込み、チ・カ・ホでもVR体験イベントやアカペラステージなどを展開して、NoMapsを盛り上げた。また、札幌短編映画祭の関連プロジェクトとして、呼気からアルコールが検出されないと入場できない「酔っ払いプログラム」を開催し好評を博した。

〈交流（Meet-up）〉

2年間のオンライン交流を経て、NoMaps2022では久しぶりとなるリアルミートアップを連日開催。分野、年代、地域など属性の異なる人たちが集い、未来を見据えて語り合うシーンに溢れ、「新しい社会を創ろうとする人たちのベースキャンプ」を標榜するNoMapsらしいミートアップとなった。また、カンファレンス会場に併設したオープンラウンジでも日中から多くの人の交流が生まれた。

NoMaps2022

NoMaps

〈実験（Experiment）〉

道庁南エリアのエリアマネジメントの一環として、新しい働き方を模索する実証実験「おそとワーク」や、大通公園をフィールドとして、中高生やクリエイターが新しい利活用について考え、実験する「大通公園プレイスメイキング実証実験」など、公共空間の新たな利活用を模索する2つの実証実験を期間中に展開した。

■2022年度の新規取り組みとその成果・特色など

“まちなか同時多発フェス”を掲げ、新たな団体等を巻きこみながら、より一般向けの企画を拡大し、NoMapsをより多くの人たちに体感してもらえるように企画をデザインした。その結果として、いままで接点のなかった層にNoMapsに参加してもらうことができた。

■他イベントや非コンテンツ企業との連携事例などの実施事例、件数・成果

IT系業界団体や教育関係団体、札幌国際芸術祭のほか、札幌商工会議所青年部や札幌青年会議所など若手主体の経済団体も巻き込み、多様なジャンル・母体と連携しながら、多彩なイベントを展開した。全体のうち、共催または他団体が主催のコンテンツが半数近くになっており、様々な団体・企業を巻きこみながら運営し、みなで共創する場としての色合いを強めている。